



アーツ前橋のみなさま

ご無沙汰しております。

梅雨時期とは思えない暑さが続きますが、いかがお過ごしでしょうか。

この様な状況のなか、企画展が開催とのこと大変喜ばしく思います。

今日は、いわゆるコロナ禍の中での私の日常をお伝えしようと思い、お手紙させていただきます。



結論からいうと、この事態を俯瞰的に、傍観的に、見つめていた(いる)気がします。

この感覚は東日本大震災発災後の感覚に似ている気がします。

それは、自分の裁量をはるかに超えた社会や世界を巻き込む大きな出来事を目前に、美術家として何をしたらいいのか、何ができるか、悶々と立ち尽くしていたあの日々の様です。

その時にも社会は様々な課題を抱き、議論し、そして立ち向かいました。

再び今回の様な事態を経て、いったいなにを克服してきたのだろうかとも感じるのです。

言い換えれば、昨今の経済の脆さ、人々の日常生活の脆さが改めて露呈したように思えます。

他方、美術はどうでしょうか？

大衆社会に美術という類の物が生まれて以降の数百年、世界は度重なる戦争や動乱、自然災害、疫病の蔓延など幾度もの危機に見舞われながらも、その文化は絶えることはありません



んでした。

それは、美術という思想の強さを物語る様に思えます。

一見して美術や美術家は、実態がわかりにくい様に思われるでしょう。

この思想は何事にも屈せず着実に現代にまで歩みを続けてきました。そればかりか、時には社会の下支えの役割を果たしてきたことでしょう。

これは、美術が持つ本来的、本質的な独自の時間軸による差異がもたらすことなのかもしれません。

経済は、日々循環させて行く必要があります。また、衰退させることもできません。

人々の暮らしも、日々の消費を止めないための様々な供給を必要とします。

しかし、美術は時に立ち止まり、社会の出来事を受け止め、再び歩み出す時までじっと堪えることができます。その時でさえも思想は誰にも、何事によっても止められることはありません。

身体的にも社会的にも、経済的にも制約を受けません。

そしてその思想により、社会に見えない未来を想像させるきっかけを与えることもできるでしょう。

今回の事態を受け、このことは美術家として自負できることだなど、改めて体得しました。

もちろん、コマーシャルギャラリーや美術館など、事業性の高いフィールドの美術関連は例外なく打撃を受けていると思いますが、それはこの文脈のなかでは経済活動のひとつにまとめて考えたいと思います。

さて、話を身の回りのことに近づけたいと思います。

私自身の生活は、コロナ禍による経済的には大きな影響を受けていないと言えます。

日頃から美術家として生活しているので、そもそも在宅作業でし、俗にいう「勤め人」の方々の様な雇用関係や定期収入が元来ないので。

その一方で、予定されていた美術関連事業が軒並み延期または中止になり、発表の機会を失ったことが非常に残念に感じています。また、美術や美術家の存在意義を再考させられています。

冒頭に記したように、私はこの事態を俯瞰してきた訳ですが、それは自分自身が他の人より生きる業がある安心感からか、はたまた、人々や社会がどの様に立ち向かって行くのかを観察したかったからかもしれません。

良くも悪くも時間が多く取れる様になった今、私は目の前の事というよりも、半年、一年先、数年先のために、資料を整理したりプランを描いたり、有意義に時間を使っています。それ以



外にも、美術家業としての持続化給付金や持続化補助金の申請などを行って今後の活動に備えました。

みなさまにおかれては、施設の性質上、様々な制約や規制の下におかれていることと思います。美術史だけでなく、地域に根ざすアーツ前橋の皆さんのご活躍に今後も期待しています。

まだまだ不安定な状況が続きますが、みなさまどうぞご自愛してお過ごしください。

増田拓史

2020年 6月